

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 ソン ジェー ヒョン  
孫 在 賢

韓国に分布する諸方言アクセントの全体像の解明を目的とする本論文は、その主要なタイプを網羅的に調査してそれらの体系を明らかにするとともに、「無アクセント」方言とされてきたソウル方言も新たな観点から検討して「1型アクセント」と位置付けたものである。

主な調査対象は、朝鮮半島東南部の慶尚道、中央部東側の江原道、西南部の全羅道の諸方言である。主要方言の記述内容は、名詞のアクセント体系、複合名詞のアクセント規則、助詞のアクセント、動詞・形容詞の活用形のアクセントに及ぶ。

第1章は、早くからアクセントの存在が知られ、研究も多い慶尚道方言を扱う。その中心は執筆者の母語の大邱市方言で、 $n$ 音節語に $n+1$ ないし $n+2$ の対立を認める従来の説を退け、 $n$ 音節語に $2n-1$ の対立のある体系を提唱する。続いて、このようにアクセント単位の長さに応じてアクセントの対立数も増える「多型アクセント」とは別に、大邱市の周辺地域には、アクセント単位の長さが増えても対立が一定数 $N$ 以上には増えない「 $N$ 型アクセント」のうち、5型アクセント、4型アクセント、3型アクセントの諸タイプが存在することも明らかにし、5型から4型への移行のプロセスを推定する。

続く章では、無アクセントとも有アクセントとも言われて諸説があった江原道方言を取り上げる。現地調査の結果、4型アクセント、3型アクセント、2型アクセント、そして言い切り形と接続形の区別をもちながらも環境を指定すれば音調型は1つに決まる1型アクセントが分布していることを明らかにし、先行研究を大幅に修正する。

全羅道方言では、3種の音調型と分節音との間に相補分布の関係があり分節音からアクセントが予測できるとされていた光州方言を、詳細な観察により、実はその予測が不可能な3型アクセント体系であると認定した点が目を引く。

本論文の特長は、以上に見るように、多数の調査語彙を用いた現地調査によって多くの新事実を明らかにした点にある。その一方で、新資料の提示に力を注ぐあまり、個々の方言の分析になお詰めるべき課題を残したことも否めない。前提となる1単位形の認定基準、長母音の音韻論的取り扱いなどがそれで、その1型アクセントの定義も必ずしも明確ではない。終章のまとめも、これだけの調査をしたのだから、それを踏まえて独自の論を展開して欲しかったところである。

しかしながら、韓国にあると見られる有アクセント方言の主要なタイプを一人で調査し、その実態と分布の概略を明らかにした功績は大きい。今後の韓国語アクセント研究にとって必ず参照すべき基本文献の一つとなるに違いない。本審査委員会は、本論文を博士(文学)にふさわしいものと判断する。